お茶の水女子大学中国文学会創設前後を振り返って

藤山和子
菅原博子

お茶の水女子大学文教育学部中国文学科が昭和二十四年（一九四九年）に発足してから、研究室としての最初の刊行物は昭和三十一年（一九五六年）発行の「中国文学研究会報」でしたが、これは一号のみで後が続きませんでした。次いで昭和三十六年（一九六一年）発行の「嚶鳴」は三号まで、昭和四十六年（一九七一年）発行の「有瞳」は隔年で四号まで出されました。これらは研究発表のための機関誌ではありませんでしたが、いずれもお茶大中国文学科で中国文学を学んでいる学生の意見発表の場として発行されたものと思われます。ただ、編集担当は学年順送りという取り決めだけでは組織力が弱く、残念なことに長続きしませんでした。しかし、こうして何度も機関誌を出そうという努力が払われたということは、お互いに切磋琢磨しつつ学びたいという意欲を、いつの時代の学生もが強く持っていたという表れであると思います。

学科創設三十年目の昭和五十五年（一九八〇年）には、修士課程を含めた卒業生が二百名に達し、その頃には在校生・卒業生有志による「説文読書会」など、多くの研究会や読書会が組織されていました。また、教育・研究の分野で活躍する卒業生も増えてきました。当時、研究発表の場として活動を続けていた会に「五土会」があ

ります。「五土会」とは昭和四十九年（一九七四年）三月修了生の修士論文発表会のあと、定期的な研究発表の場があるといいという話から生まれた会です。その当時行われていたどの読書会・研究会ともぶつからないであろう第五土曜日なら実施が可能という見通しで、有志が運営していくという形をとりました。発表依頼の多くは夜電話のやり取りで、開催の連絡は研究室の掲示板で、会場は大学院演習室でというこじんまりとした会でした。ときには学部生に卒論発表をお願いすることもあり、参加者の多寡はともかく、およそ七年間、あくまでも有志による研究発表の場として活動を継続してきました。お茶大中文学会の前身というわけではありませんでしたが、学会発足に際して自然と解消しました。

このように学習・研究発表の意欲が一部にたかまりつつあった状況をふまえ、有志の間で何度か学会創設について話し合われるようになりました。

昭和五十五年（一九八〇年）十一月二十日発行の「同窓会便り」（十四回生担当）に佐藤保先生が「報告一則」という文を寄せられ、何人かの先輩会員がお茶大中文の卒業生を中心とする学会の可能性について話し合われたと聞く、具体的なことはすべてまだこれからの段階だが、学会創設について、同窓会の全会員のみなさんにいっしょに考えてほしい、という趣旨を述べておられます。

昭和五十六年（一九八一年）三月一日付けで、有志代表として、平松圭子・黒澤秀子・藤山和子・根岸政子四名の連名で、学会設立への呼びかけと、学会への関心の有無を問う手紙が、お茶大中文の全卒業生・修了生に出されました。その文を一部抜粋すると次の通りです。

（近年研究会・読書会がいくつか行われており）このような現状をふまえまして、有志の間で何度か「学会」のことが話し合われて参りました。その結果、現在個別の形で行われているそれらの意欲と力を結集して、

新たに研究発表会と機関誌（学会誌）の発行を行う一つの学会を作ることが、今後のお互いの研究勉学のためにも、さらにはこれからお茶大中文を卒業する後輩のためにも極めて有益であると考えまして、お茶大中文の卒業生・学生の有志並びに先生がたとで構成するお茶の水女子大学中国文学会（仮称）の結成を呼びかけることにいたしました。

この呼びかけに対し、多くの卒業生・修了生から設立の際には参加したいという希望が寄せられ、また、研究室全教官の賛同も得て、卒業生から平松圭子・黒澤秀子・藤山和子・菅原博子・根岸政子、教官から近藤光男・佐藤保両先生の七名が集り会則を作り、今後の具体的な会の運営を検討しました。会の名称は「お茶の水女子大学中国文学会」とし、初代会長は会則に基づき学科主任の近藤光男先生、委員は呼びかけ人が中心となり、上記六名が委員候補となりました。

同年四月七日付けでこの会則に依る学会への入会希望の有無と、委員六名の信任を問う手紙が、再び全卒業・修了生に出されました。その結果百八名（うち学生会員十四名）の入会申し込みがありました。委員六名の信任も得て、互選により平松圭子が委員長に選出され、いよいよお茶の水女子大学中国文学会が始動することとなりました。

この頃、卒業生のお一人から百万円もの多額のご寄付をいただきました。これを特別基金としてプールし、その利息を会の運営に当てることとしました。学会運営の基礎を固める意味で大変にありがたいことでした。

五月二十三日、発会式を兼ねて記念講演会を開催し、四十数名の参加がありました。記念講演では、当初予定していた頼惟勤先生が体調を崩され、急遽お願いした近藤光男先生に「段玉裁の学問」という演目で、佐藤保先生には「〈芝〉考」という演目でお話いただきました。会務報告として、五十六年度の例会は九月と十一月に行う

こと、次年度以降は四月・六月・九月・十一月の年四回開催の予定であることと、機関誌の発行について検討中であることなどが報告されました。

七月二十九日、委員長名で、翌年四月に「お茶の水女子大学中国文学会報」創刊号を出す準備を進めているということと、会誌への原稿募集を行いました。

第二回・第三回の例会も順調に終え、学会誌への数編の投稿申し込みもあり、会誌発行の準備は整いました。ただ、年会費三千円、会員数百七名（十二月現在）、会費納入率七十％という状況では、財政的に会誌発行はとうてい不可能と判断せざるを得ませんでした。そこで、已む無く、十二月七日付けで、会長・委員長連名で全会員に会誌発行のためのご寄付をお願いしました。その結果、大勢のかたがたのご協力を得て、寄付の総額は百十七万三千円に達しました。先の百万円のご寄付もあり、ここにお茶大中文学会が将来にわたって安定した活動を続けていく経済的基盤が出来あがりました。

翌昭和五十七年（一九八二年）四月、待望の「お茶の水女子大学中国文学会報」第一号が創刊されました（A5版・百二十頁・論文七編）。会の運営、会誌の編集・校正・発送などすべてを手探り状態で進めてきた委員たちにとっては、ようやく何とか軌道に乗せることが出来たと、感無量のものがありました。当初は例会通知をはじめとするお知らせ発送に当たっても、宛名を手書きし、文面も鉄筆で原紙を切り、謄写版で印刷するという、大変手間のかかる作業でした。また、総会に向けて、会計報告、会員名簿などその都度はじめからその年度のものをガリ版で作成するという、当時としては当り前といえる手順の仕事ではありましたが、まだＯＡ機器の恩恵に浴さない時でしたから、委員一同、時間をやりくりし、都合をつけあって協力しました。

以後、数人の委員交代を経て、年一回の会誌発行、年四回の例会開催と順調に活動を続けてきましたが、昭和

六十二年（一九八七年）三月には近藤光男先生・頼惟勤先生が、六十三年には中山時子先生が定年で退官されることになりました。そこで、六十二年発行予定の学会誌第六号を近藤・頼両先生の退官記念号に、第七号を中山先生の退官記念号に当てることを計画、会員の賛同も得ました。二回続けて記念号を発行するとなると通常の二倍の経費がかかることが予想され、ここで再び会員のかたがたにご寄付をお願いすることになりました。皆様のご協力を得て、寄付の総額は百十四万二千円に達し、それぞれ記念号を発行することが出来ました。

昭和六十二年四月二十五日の第六回大会では、近藤光男先生には「揚州選学とその文学史的意義について」という演目で、頼惟勤先生には「上梁文について」という演目で特別講演をしていただきました。講演会終了後には、初めての試みとして研究室と共催で懇親会を開催、会員以外の大勢の卒業生にも参加していただきました。なお、六十三年四月二十九日には、中山時子先生の退官記念パーティが、これは先生のご希望で研究室と同窓会の共催で行われました。

学会創設三十周年を迎えようとする今、会員数は百七十一名（平成二十二年四月現在）にのぼり、教育・研究に携わる会員も増加しつつあります。中国語・中国文学という特殊性があるとはいえ、お茶の水女子大学の中でもその比率は多いほうではないかと思います。お茶の水女子大学中国文学会の存在が、会員にとって有益だったろうと信じています。同時に委員として実務に携わり、会を運営し続けてくださっている大勢のかたがたに心から御礼を申し上げたいと思います。